1. 願書の記載の基本

1.1 【意匠に係る物品】の欄について

(1) 「物品の区分」

意匠登録出願をする場合には、その意匠に係る物品が何であるかを願書の【意匠に係る物品】の欄に記載する必要があります(意6条1項3号、様式2)。そして、この【意匠に係る物品】の欄には、経済産業省令で定めたその物品の属する「物品の区分」を記載するよう規定されています(意7条、別表一備考一)。

また、その物品が「物品の区分」のいずれにも属さない場合は、「別表一」の下欄に掲げる「物品の区分」と同程度の区分による「物品の区分」を【意匠に係る物品】の欄に記載する(別表一備考二)とともに、【意匠に係る物品の説明】の欄に、その物品の使用の目的、使用の状態等物品の理解を助けることのできるような説明を記載するよう規定されています(様式2備考39)。また、使用状態参考図等の図を必要とする場合もあります。なお、「別表一」掲載されていない「物品の区分」でも、出願時にすでに一般名称として普通に使われており、使用の目的、使用状態等が明らかであるものについては、それらの記載は不要です。

(注)「意匠法施行規則」及び「別表第一」は、特許庁のホームページから総務省が運営するポータルサイトへのリンクがあり、そちらで検索することができます(別表第一は最後の部分に掲載)。「トップページ」→「制度・手続」→「法令・基準」→「所管法令関係」→「法令等[法令データ提供システム/総務省行政管理局へ]」

別表第一(第七条関係) 【抜粋】	
一 製造食品 及び嗜好品	物品の区分
製造食品 ソーセージ アイスクリーム かまぼこ	
二十七 楽器	
けん盤楽器	
管楽器等	
トランペット クラリネット たて笛 横笛 ハーモニカ けん盤付き吹奏楽器	ピアノ 電気ピアノ 電子ピアノ ピアノ用譜面立て ピアノ用ペダル ピアノ用カバー オルガン 電動オルガン 電子オルガン オルガン用譜面立て アコーディオン

備考
一 この表の下欄に掲げる物品の区分に属する物品について意匠登録出願をするときは、その物品の属する物品の区分を願書の「意匠に係る物品」の欄に記載しなければならない。
二 この表の下欄に掲げる物品の区分のいずれにも属さない物品について意匠登録出願をするときは、その下欄に掲げる物品の区分と同程度の区分による物品の区分を願書の「意匠に係る物品」の欄に記載しなければならない。

(2) 意匠分類に掲載の物品

「別表一」の下欄には、約 2,400 の「物品の区分」が掲載されていますが、その物品の区分に属さない物品については、「意匠分類」を活用することが有効です。「意匠分類」には、「この分類に含まれる物品」の項に約 7,000 の物品が掲載されています。これは、「別表一」の「物品の区分」に掲載されているものの他、過去に登録意匠の「物品の区分」として用いられたもの等が掲載されています。

(注)「意匠分類表」は、特許庁ホームページ内で閲覧できます。

「トップページ」→「制度・手続」→「意匠」→「制度」→「意匠分類に関する情報」→「日本意匠分類関連情報」

意匠分類一覧表 【抜粋】

E 4 楽器			
意匠分類の記号	意匠分類の表示 Dターム記号/Dタームの表示 (付与記号)	この分類に含まれる物品	対応する 旧意匠分類
E4-00	その他の楽器	指揮棒、楽譜見台、トワリングバトン、譜面台	E4-00
E4-01	リズム発生器	リズム発生器	E4-01
E4-02	オルゴール	オルゴール	E4-02
E4-10	楽器練習具	練習用鍵盤、音程表示器、楽音調律器、調子笛、音楽用標準音発生器、音さ	E4-10
E4-11	メトロノーム	メトロノーム	E4-11
E4-40	管楽器等	トランペット、ホルン、フルート、クラリネット、オーボエ、バスーン、サクソホン、たて笛、横笛、尺八、ひちりき、笙	E4-40

(3) 物品が「別表一」の「物品の区分」に該当しない場合の記載例

- ①「別表一」に掲載された「物品の区分」に合わせた「物品の区分」とする場合
 例えば「アルトサクソホン」という管楽器の意匠を出願する場合、「物品の区分」及び【意匠に係る物品の説明】の欄の記載は、次のようになります。

「別表一」の「物品の区分」には、管楽器等としてはトランペット、クラリネット、たて笛、横笛、ハーモニカ、けん盤付き吹奏楽器のみ掲載されています（前頁の「別表一」下欄 参照）。

このような「物品の区分」から、「楽器」や「管楽器」としたのでは総括的名称であり適当でないことがわかります。

また、トランペット、クラリネット等の「物品の区分」から、「アルトサクソホン」や「バスサクソホン」のように用途を更に限定した「物品の区分」にする必要がないことがわかります。

これらから、「物品の区分」は「サクソホン」とすればよいこととなります。

【意匠に係る物品の説明】については、「サクソホン」は、すでに一般名称化しているものであるので、使用の目的等を記載する必要はありません。

②物品が多機能物品である場合

物品が多機能物品である場合は、「別表一」の「物品の区分」に掲載されていないことが多く、また、「物品の区分」を参考にすることもできないので、意匠分類に掲載の物品に該当するものがあればそれを「物品の区分」とし、それにもなければ新たに考えることが必要になります。

新たに考える場合は、その物品が有する複数の機能（個別の物品になり得る程度の機能）を全て表した表現とすることが適当です。「○○付き××」のように表すこととなります。○○と××の表し方（順序）については、どちらの形状または機能が主であるかにより、主となる方を後にして表します。三以上の機能を有する物品の場合にも同様に主となる方を最後にして「△△、○○付き××」のように表します。しかし、「△△兼○○兼××」とか「△△付き○○付き××」といった表現は適当ではありません。

〈適当な例〉

- 「ラジオ受信機付きテープレコーダー」
- 「ラジオ受信機、テープレコーダー付きテレビ受像機」
- 「シャープペンシル及びマーキングペン付きボールペン」

〈適当ではない例〉

- 「ラジオ受信機・テープレコーダー」
- 「ラジオ受信機兼テープレコーダー兼テレビ受像機」

ただし、多機能の一部または全部が新規である場合等では、「○○付き××」でない組合せを端的に表す新しい名称を「物品の区分」とすることが良い場合もあります。

なお、多機能物品の場合も、必要に応じて、願書の【意匠に係る物品の説明】の欄にその物品の使用方法等の説明を記載し、また、図面に【使用状態図】、【使用状態を示す参考図】等を記載します。特に多機能の一部または全部が新規なものである場合には、それらの記載が必要になります。

③「物品の区分」として不適切な表現例

意匠審査基準で定めた「物品の区分」として不適切な表現は、拒絶の理由になるので、注意してください。

〔「物品の区分」として不適切な表現の例〕

- (i) 「物品の区分」またはそれと同程度の区分による「物品の区分」によらないもの
- (イ) 商標名、何何式等固有名詞を付したもの
 - (ロ) 総括名称を用いたもの
(例、雨戸と記載するのを建築用品と記載する場合等)
 - (ハ) 構造又は作用効果を付したもの
(例、何何装置、何何方法)
 - (ニ) 省略された物品の区分
(例、8ミリ)
 - (ホ) 外国文字を用いたもの
 - (ヘ) 日本語化されていない外国語を用いたもの
 - (ト) 用途を明確に示していないもの
(例、ブロック)
 - (チ) 組（意匠法施行規則別表第二（以下「別表第二」という。）によらないもの）、セット、一揃、ユニット（歯科用ユニットを除く。）、一对、一足等の語を用いたもの
 - (リ) 形状、模様及び色彩に関する名称を付したもの
 - (ヌ) 材質名を付したもの
(例、何何製)
- ただし、普通名称化している場合は除く。
- (意匠審査基準 51.1.2.1 参照)
- (ii) 二以上の意匠を包含し意匠ごとにした意匠登録出願と認められないもの
- 二以上の「物品の区分」を願書の【意匠に係る物品】の欄に並列して記載したもの
(例、「トランペット、クラリネット、たて笛」と並記した場合)
- (意匠審査基準 51.1.2.2 参照)

(注) 「意匠審査基準」は、特許庁ホームページ内で閲覧できます。
「トップページ」→「制度・手続」→「意匠」→「制度」→「基準・便覧・ガイドライン」→「審査」→「意匠審査基準」

1.2 【意匠に係る物品の説明】の欄について

(1) 「別表一」の「物品の区分」のいずれにも属さない物品の場合

【意匠に係る物品の説明】の欄に、その物品の使用の目的、使用の状態等物品の理解を助けることのできるような説明を記載する必要があります。(様式2備考39)。新規な物品や多機能物品がこれに該当します。

また、意匠法第2条第2項に規定する操作の「画像」を含む場合は、その「画像」を含む意匠に係る物品の機能及び「画像」の操作の説明を記載する必要があります。(様式2備考40)

なお、「別表一」に掲載されていない「物品の区分」でも、出願時にすでに一般名称として普通に使われており、使用の目的、使用状態等が明らかであるものについては、それらの記載は不要です。

(2) 「別表一」の「物品の区分」に属す物品の場合

「別表一」の「物品の区分」に属す物品であっても、形態が極めて新規である等により、どのように使用するか等を理解することができない場合は、その物品の使用方法等の説明を【意匠に係る物品の説明】の欄に記載することが必要です。このような場合にも、説明の記載がないと、物品が不明であるとの拒絶の理由になるので注意してください。

なお、専門的機器等、一般的にはあまり知られていない物品については、使用の目的、使用の状態等を記載するようお願いいたします。

(3) 記載内容の留意点

①簡潔な表現

【意匠に係る物品の説明】は、その物品の理解を助けるために使用の目的、使用の状態等を簡潔にわかりやすく説明することが望ましく、特許の明細書の発明の詳細な説明のように長文にならないようお願いします。

②登録商標を説明に用いることは、商標権への影響を考慮し、認めていません。

③図、表等の記載も認めていません。(様式2備考43)

1.3 【意匠の説明】の欄について

(1) 記載を必要とする事項

- ①意匠を認識する上で物品の材質又は大きさの理解を必要とする場合に、物品の材質又は大きさの記載が必要です。(意6条3項、様式2備考41)
- ②形態の特定に関わって、次の事項の記載が必要です。
- a) 形態が変化する場合に、その変化の前後にわたる形態の意匠登録を受けようとする場合に、その旨及び当該機能の説明の記載が必要です。(意6条4項、様式2備考41)
 - b) 白色又は黒色のいずれか一色を省略して図を記載した場合は、その旨の記載が必要です。(意6条5、6項、様式2備考42)
 - c) 形態の全部又は一部が透明である場合は、その旨の記載が必要です。(意6条7項、様式2備考41)
 - d) 図形中に立体表面の形態を特定するための線、点その他のもの(陰)を記載した場合に、その旨及びどれが形態を特定するためのものかを記載します。
(様式6備考7)
 - e) 図面の記載で図を省略した場合に、省略した図及びその理由(「背面図は正面図と同一のため背面図を省略する」等)を記載します。(様式6備考8、10)
 - f) 図を等角投影図法や斜投影図法とする場合の作図法の別、キャビネット図又はカバリエ図の別及び傾角を記載します。(様式6備考9)
 - g) 部分意匠において、意匠登録を受けようとする部分の特定方法を記載します。
(様式6備考11)
 - h) 形態が連続する意匠の連続状態を省略した図とした場合のその旨を記載します。
(様式6備考12)
 - i) 図の一部を省略した場合のその旨及び省略箇所の図面上の寸法を記載します。
(様式6備考13)

(2) 記載内容の留意点

- ①以下の例のように意匠が特定しないものとなる記載内容は、拒絶の理由になります。
- a) 図面と説明が整合しない例
 - ・図面には色彩が施されていないにもかかわらず、「本願意匠は黄緑色である。」等の記載
 - ・図面には模様が表されていないにもかかわらず、「本願意匠の表面は木目模様で

ある。」等の記載

b) 一の形態に特定したものとならない例

- ・図面には、球形の形状が表されているが、「本願意匠は卵形または紡錘形の場合もある。」等の記載
- ・図面には、赤色の色彩が施されているが、「本願意匠は、赤に代えて暖色系の色彩を施す場合もある。」等の記載
- ・「ハンドバッグ」の意匠で、「材質は、軟質ビニールまたはステンレス板である。」等のように、材質の列記がその意匠の属する分野の常識から複数の異なる意匠を想起させ、その結果、多意匠と認識されるような記載
- ・「大きさは、高さが 10 cm から 1m である。」等のように、大きさがその意匠の属する分野の常識の範囲を越えるような数値の幅をもっているために、著しく異なる意匠を想起させ、その結果、多意匠と認識されるような記載

②図、表等の記載は認めていません。(様式2備考43)

【書類名】	意匠登録願
【整理番号】	19-A-3-AN
【提出日】	平成〇〇年〇〇月〇〇日
【あて先】	特許庁長官 殿
【意匠に係る物品】	チューナー付き磁気ディスクレコーダー
【意匠の創作をした者】	
【住所又は居所】	東京都千代田区霞が関3-3-2
【氏名】	意匠一郎
【意匠登録出願人】	
【識別番号】	000000003
【住所又は居所】	東京都千代田区霞が関3-3-3
【氏名又は名称】	意匠株式会社
【代理人】	
【識別番号】	100000023
【住所又は居所】	東京都千代田区霞が関3-3-4
【弁理士】	
【氏名又は名称】	代理一郎
【電話番号】	03-3123-4567
【手数料の表示】	
【予納台帳番号】	012345
【納付金額】	16000
【提出物件の目録】	
【物件名】	図面 1
【意匠に係る物品の説明】	この物品は、ハイビジョン放送を受信可能なチューナーを有し、受信したテレビ番組の録画、再生を行うための磁気ディスクレコーダーである。
【意匠の説明】	背面図は正面図と同一につき、背面図を省略する。
【書類名】	図面

←【意匠に係る物品の説明】

←【意匠の説明】